

鉄砲の伝来

執筆・講師
山本博文

学習のねらい

大航海時代が始まり、ヨーロッパ諸国がアジアに進出してくると、日本もヨーロッパ諸国との関係が始まる。最初は、ポルトガル人のもたらした鉄砲で、南蛮貿易が始まり、キリスト教が伝来する。こうしたヨーロッパ人とヨーロッパ文化との接触が、日本に何をもたらしたかを理解する。

鉄砲の伝来と南蛮貿易

鉄砲は、1543年、ポルトガル人を乗せて中国の貿易港である寧波^{ニンポー}に向かった倭寇^{わこう}の船が、種子島^{たねがしま}に漂着したことが伝来の契機である。ポルトガル人は、島主種子島時堯^{ねいほ たねがしまときたか}に鉄砲を発射して見せ、時堯は鉄砲二挺を購入し、家臣にその使用法と製造法を学ばせた。当時、種子島は、和泉の堺などから東南アジアに向かう貿易ルートに組み込まれており、すぐに堺などに伝えられた。そして鉄砲は、まもなく堺や近江の国友、紀伊の根来などの国内で製造されるようになり、戦国大名の間に普及していった。

ポルトガル人の種子島漂着を契機に、ポルトガル船が毎年のように肥前の平戸や長崎、豊後の府内（大分）など九州の港に来航するようになり、貿易を行った。日本人は、ポルトガル人やスペイン人を南蛮人^{なんばんじん}と呼んだので、彼らとの貿易を南蛮貿易^{なんばんぼうえき}という。南蛮貿易では、鉄砲や火薬、中国産の生糸や絹織物などを輸入し、当時、国内で産出量が増大していた銀を輸出した。このころ、輸入されたものの中には、「コンペイトウ」や「カステラ」、「カルタ」、「ボタン」など、現在でも使われているものがある。

キリスト教の伝来

1549年、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島に来航し、キリスト教を伝えた。イエズス会は、カトリックの一派で、貿易船に便乗し、アジアで布教を進めていた。ザビエルは、鹿児島で布教した後、京都に上り、天皇から布教の許可を得ようとした。しかし、これはうまくいかず、山口、豊後府内などを訪れ、それぞれ大内氏、大友氏の保護を得て、布教に努めた。1551年、ザビエルは日本を離れるが、同行した宣教師は日本に残って布教を進

※：室町時代初期まで日本人が中心の海賊。戦国時代には大部分が中国人となった。

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

め、その後も宣教師の来日が続き、各地に南蛮寺と呼ばれる教会やセミナリオ（神学校）、コレジオ（宣教師の養成所）、病院などを建設し、布教や慈善事業を行った。

宣教師たちは熱心に布教し、またキリスト教に入信すると病気が治るなどのうわさも広まり、九州を中心にキリスト教信者は増えていった。大友義鎮（宗麟）、大村純忠、有馬晴信らの大名は、キリスト教の教義に共感もあり、また貿易の利益が見込めるためもあって、キリスト教に入信した。これをキリシタン大名という。大友・大村・有馬の3大名は、4人の少年使節をローマ教皇のもとに派遣した（天正遣欧使節）。4人の少年たちは、ヨーロッパ各地で熱狂的な歓迎を受け、ローマ教皇の謁見を受けた。しかし、彼らが帰ってきたころには、日本ではキリスト教が禁止されており、その経験を生かすことはできなかった。

織田信長の統一事業

尾張の戦国大名だった織田信長は、1560年、領内に侵入してきた今川義元を桶狭間の戦いで破ったことを契機に勢力を拡大し、美濃の斎藤氏を滅ぼし、領地を拡大していった。1568年には、室町幕府13代将軍足利義輝の弟義昭を奉じて京都に上り、義昭が15代将軍になるのを援助した。信長は、堺や大津、草津などの貿易や流通の拠点を押さえ、1573年には対立した足利義昭を追放して、室町幕府を滅亡させた。その後、越前の朝倉氏、北近江の浅井氏を滅ぼし、伊勢長島や越前の一方向一揆を滅ぼした。1575年には、甲斐の武田勝頼を大量の鉄砲を巧みに使った集団戦法で破り（長篠の戦い）、全国統一への展望を開いた。

信長の全国統一の拠点は、琵琶湖に面した地に築いた五層の天守閣を持つ安土城で、安土城下では商工業者に自由な営業を認める楽市・楽座の令を出して都市の繁栄をはかった。また、畿内に多く設けられていた関所を撤廃し、貨幣の円滑な流通のために撰銭令を出して、商業の発達に力をそそいだ。この信長の政策によって、畿内の有力な寺社や公家は経済的な打撃を受け、これまでの支配秩序は崩れていった。